

---

# オレたちノ戦争ビヨリ

宮本駿河

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オレタチノ戦争ビヨリ

### 【Nコード】

N6502Y

### 【作者名】

宮本駿河

### 【あらすじ】

時代は2050年代。

ヨーロッパはEOSRD (European Organization for Synthetic Research and Development) と呼ばれる組織がその技術と力で制覇していた。

そんなEOSRDの教授の息子の雨宮拓弥はある日、EOSDRから来たという謎の金髪少女と出会う。

自分は人間ではないと名乗った少女との出会いは拓弥の日常を大き

く変化させ、争いの耐えぬ世界へと変えていくのだった。  
E O S R Dと拓弥たちが繰り広げる、SFバトルコメディ。

## 第イチ話 来訪者（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台は現実世界とは似て非なるものです。

実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものは、名称が同一であつても何の関係もありません。

## 第イチ話 来訪者

雨が降る。

降っていた。

その日は関東全域が雨雲でおおわれており、洗濯物は部屋で湿気を発生させている。

「うっ…ジメジメするな…」

外で干せない洗濯物は、部屋の端から端まで張り巡らされた紐にかけられている。

電気を点けていない昼の部屋は薄暗く、リビングの机の上には父が元住んでいた書斎から引つ張り出した書類が置いてあった。

テレビには大雨の予報が出ている。

窓から見た外は相も変わらず、大粒の雨が降り続けている。

まるで誰かの死を惜しむように。

その時、リビングの電話が鳴った。

「…！はいはい…」

受話器を取り、ボタンを押す。

『もしもし…拓弥君か？』

「あ、はい、そうですね…どなたですか？」

『わ、私は雨宮君の同僚だ…拓弥君、落ち着いて聞いてほしい…』

『  
「なんですか…？」』

嫌な予感が頭を過ぎる。

『君のお父さんが殺害された。』

「他殺ですって・・・まだ犯人つかまってないんですってね・・・」

「物騒な世の中ですよね・・・それにしても奥さんのほうは来てないんですか？」

「海外出張で忙しいそうですよ・・・でも葬式にも来ないなんてひどいですね・・・」

喪服を着た父の友人と見える女性三人の声を聞いた。

あの日と同じく雨が降っている。

大粒の雨粒が傘を叩いて滑り落ちていく。

しかし、いつしか目から雨粒が流れているのに気づいた。

もう中学三年なのに。

「父さん・・・」

棺が雨の中、車に運ばれていく。

運んでいるのは父の友人。

葬儀の進行役も父の友人。

周りにはみんな、父の友人。

親戚もいない。母もいない。今この葬儀で父にいちばん近いのは自分なのに。

その時、

「拓弥君かい・・・？」  
「え・・・？」

目の前に立っていたのは喪服に身を包んだ30代ほどの男性だった。

「私だよ。あの時電話した・・・」

「あ、ああ・・・あの時はどうも・・・」

「いやいや、君のお父さんのすぐ隣にいたのに・・・助けられなくて  
すまない・・・」

「え？隣にいたんですか・・・？」

「ああ、しかし私が私用で部屋を空けている時に殺されたらしい・・・」

「そう・・・ですか・・・」

「君のお父さんから預かっているものがあるんだ。」  
「？」

すると男性は書類の束を出してきた。

「これって・・・」

男性が周りに聞こえないように耳元で言う。

「我々の研究していたことについての書類だ・・・君なら理解できる  
だろう？」

「は、はあ・・・」

「それをよく読んで君のお父さんがやろうとしていたこと・・・いや  
80%は成し遂げたこと・・・考えてみるといい。」

「やろうとしていた・・・？80%は成し遂げた・・・？」

「その答えは自分で出すんだ。じゃ、私はこれで。」

俺に頭を下げた男性は父さんの棺に向かって歩いて行った。

「と言ってもう2年か・・・」

俺はテーブルの上に重ねてある書類の束を見ながら昔のことを思い出していた。

「あの後、書類を見たんだけど全部英語だったからわかんなかったんだよな・・・」

高校生になり、英語の重要性を重視し、猛勉強した俺はすでに英語をマスターしているんだ。

それで今回、金庫にしまっていた書類を取り出し、解読にかかる。

「うーん・・・固有名詞が並びすぎだろ・・・」

1ページ目の2行目あたりまで読んだとき、ふと一階で何かの音がした。

「・・・？」

不審に思っただ階段を降り、一階を覗く。

「風呂場か・・・？」

恐る恐る風呂場に進んでいくと声が聞こえた。

「風呂つていうのもなかなかいいわね・・・」

「女か・・・？」

風呂場からはチャプチャプとした音が聞こえる。

「っ・・・！誰だ！！」

ガラツと風呂場の扉を開ける。

「え？」

「え？」

その時俺が見たのは、金色の髪。

しなやかな細い腕に、とても美しい足。

透き通るような白い肌に、大人びた目つきの割には子供のような小顔。

胸は・・・普通ぐらいだな・・・

「ぐあっ！？」

急に目の前が暗転した。

目に激痛が走る。

初めての目潰しに精神が動転する。

「う・・・わああ・・・？うちゅうのほつそくがみだれる・・・？」

「落ち着きなさいよ。」

「え・・・？」

先ほどの金髪少女が目の前に立っていた。

読んで字のごとく全裸で。

「どわあああああ！！！痴女だあああああ！！！」

「誰が痴女よ。服があなたの下にあるから取れないんだけど。」

「せめてタオル巻け！タオル！！」

数十秒後、タオルを巻いた金髪少女が目の前に立つ。

「私は別に見られても困らないんだけど・・・」

「俺が困るんだよ！！」

「さ、早く服を渡してくれる？この格好、寒いよ。」

「え？ああ・・・ごめん。って待て！」

尻餅の下敷きになっていた服を渡そうとするとき、あることに気づく。

「何よ？早く渡しなさいよ。」

「いやお前は誰なんだよ！？どっから入ったんだよ！？ていうかい  
くっ！？」

歳を聞いたのは男性の本能だろう。

「私は16歳よ。ほかの質問は服を渡してくれたら言っわ。」

仕方なく服を投げつける。

「ほい、渡した！早く言え！」

「着るまで待つて。」

「・・・逃げないよな？」

「逃げるわけないじゃない。だったら着替えている間、監視する？」

「それは俺が変態になるから駄目だ。」

不審に思いながらも背を向ける。

後ろではするすると衣擦れの音が鳴っていた。

衣擦れの音が止む。

「おい？そろそろ戻っていい・・・」

瞬間。

後ろから拘束された。

「うぐっ・・・!？」

「死にたくなければ動かないでいなさい。」

「何・・・？」

両腕が後ろに回されガツチリとつかまれ、動かせない。

足は両方とも他人の足で押さえられている。

首を絞める腕のさきの手からはナイフが握られていた。いや、飛び出していた。

手首の位置から、何に限らず触れたものを切り裂くような鋭利なナイフが飛び出している。

「なっ・・・ぐっ!？」

「風呂場の窓が開いていたからね、そこから入らせてもらったわ。

汚かったからついでにお風呂も入ったんだけど。あと私は誰か・・・だっけ？あなたのお父さんの知り合いよ。」

本当にさっきの少女かと思うような声が後ろから聞こえる。

「一つ聞く。あなたは私のことをどこまで知ってる？」

「はあ・・・？どういう意味・・・」

ナイフが顔に近づく。

「今は私が聞いているの。」

「し、知らない！お前のことなんか何も知らない！」

「そう、じゃ次。あなたは自分のお父さんがしていたことを知っている？」

「そ、それも・・・知らない・・・ていうか知ろうとしてた・・・」

「知ろうと？どういうこと？」

「上の俺の部屋に・・・父さんが残した書類があるんだ・・・英語だったから・・・解読しようとしてた・・・」

「ふーん・・・つまりあなたは何も知らないと？」

「し、知るわけないだろ！！早く離してくれっ！！」

腕と足を振って抵抗する。

しかし、首元のナイフがきらめく。

「ぐっ・・・！何が目的なんだ・・・！」

「目的・・・？そうね・・・」

「HOWどのようにやったか・・・知りたいからかしら？」

「はあ・・・？」

訳の分からない言葉に俺は頭が混乱する。

「とにかくあなたは何も知らないんだつたらそれでいいわ。そしてこれからも知らずにいること。いいわね?」

それと同時に拘束が解かれていた。

目の前には黒いマントで身を包む少女が立っている。

少女は2階の俺のの部屋に上がろうと思ったのか、歩き始めた。

「ま、待て!」

拓弥が自由になった手を伸ばす。

「何よ?」

「お前は・・・父さんの何かを・・・知っているのか?」

「話す必要はない。」

「ぐふっ!?!」

腹に少女の細い足が生み出したとは思えない蹴りが叩き込まれる。

視界が暗くなってゆく。

気を失う直前、俺は声を聞いた。

「私の名前はハウ。それだけ知っていればいいわ。」

あとは少女の足音しか聞こえなかった。

## 第二話 How (前書き)

この物語はフィクションです。

この物語の舞台は現実世界とは似て非なるものです。

実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものは、名称が同一であつても何の関係もありません。

## 第二話 HOW

「う……」

目を開けた。

腹が痛む。

「あ……なんで風呂場の前で寝てんだ俺……？」

フラフラと起き上がる。

リビングに行き、ふと時計を見ると午前1時を示していた。

「寝ないと……明日も学校だし……」

階段を上がり、自室に戻る。

そのままベットに潜り込んだ。

「あ……なんかいい匂いとかするけど……気のせい、だよな……」

ついでに少し暖かったのは秘密だ。

そのまま心地よい温もりに当てられて拓弥は眠りについた。

早朝。

「あ……」

昨日深夜まで起きていたからだろうか・・・ものすごく眠い・・・  
なんか視界がボヤけまくる・・・  
少し伸ばした手に妙な感覚が走る。

・・・なんだこれ・・・？大きいマシユマロか・・・？  
モミモミ。

なかなか、いい。

なんか男の感性をいじられるような・・・  
そのまま視線を少し上へ。

そこには、

「・・・楽しい？」

少し頬を赤らめて、さらにびくびくと目尻を動かしながら苦笑する  
少女の顔があった。

そして朝。

そこには遅刻だといってパンをかじってあわてて出ていくような朝  
のお約束風景はなかった。

代わりに仁王立ちになる金髪の少女と土下座をしている少年がそこ  
にはあった。

「いやなんでだよっ!？」

「なんでって何がよ？」

「なんでお前がいるのかってことだよ!!」

「あの後、あなたの部屋で書類読んでたら眠くなっちゃったんだか  
ら仕様がないうじゃない。」

「ぐっ・・・こんなバカに俺はやられたのかっ・・・!」

「いまバカっていった？バカなのはあんたでしょうが。勝手にベッ  
トに潜り込んできたうえに朝起きたらいきなり私の胸を揉むなんて・

・さすがに私も怒るわよ？」

少女・ハウが不機嫌そうに拓弥の顔をのぞき見る。

まあ確かに寝ぼけて揉んでしまったことは事実なのだが、それに対し拓弥は。

「いや後者は仕方がないとして、このベット俺のだし・・・」

「何よ。もともとベットなんて貴族のものだったのよ？何、貴族の出なの？」

「いやそんな話いま関係ないわけで・・・」

「不審者の話は信用できないってわけ？」

「当たり前だろうが・・・！！大体なんで普通に俺の部屋で寝るんだよ・・・いやいや、その前になんで逃げないんだよ！！」

「逃げる？どこに？」

拓弥は言葉に詰まってしまった。

「え・・・？そりゃあ・・・外に・・・」

「いい？今の日本の逮捕率90%を超えてるのよ？逃げたって捕まる。それにあなたは通報してないじゃない。」

「あ、そうだった！急いで通報しないと！！！」

101番をするために下に降りようとする。

見事に襟首を掴まれた。

そのままひょいと持ち上げられる。

「う、うわわっ！？なにすんだよ！？」

「私を警察に突き出すなんて信じられない。下種にもほどがあるわ。」

「な、何言ってるんだよ！不法侵入だろ！」

「あれは不法侵入じゃなくてただ単に窓が開いていたから入っただけよ。」

「それ不法侵入って言うんだよ!?!」

拓弥を片腕で持ち上げるハウがその腕をブラブラよこに振り始める。

「うおおい!?!やめろって!?!」

「ふーん、人間って意外と軽いのね。」

「何言ってるんだ...?おい!離せよ!?!」

「嫌だ。」

ハウはそのまま一本背負いを決めた。

「ぐお...ぐぐ...」

「じゃ、私は下に行ってるわね!。」

「お、おい...帰らない...の...か。(カクッ)」

拓弥は本日二回目の失神を体験した。

同時刻、拓弥の隣の部屋では朝を迎える人物がいた。

「...朝支度。」

体型からは女性と見え、彼女はベットから出るとダンスから服を取り出し着替え始めた。

ひらひらとした長いスカートを穿き、黒と白の服を着る。

メイド服だった。

着替えを済ますと階段を下りてキッチンに向かう。

彼女は途中でリビングのソファに寝ころび、テレビを点けて朝のニュースを見てまどろんでいる金髪隻眼の少女を発見したが、朝食の支度が先で、無視した。

「何よ、雨じゃない。」

「本日は午後から雨の予定です。」

「ふーん……って何よアンタ。」

「その言葉、そのままお返しいたします。」

「私はちよつと知りたいことがあって来た客人よ。」

「知りたいことは天気予報ですか？」

「違うわよ。」

「ではなんでしょうか？」

「あなたは知らなくていいわ。」

「わかりました。朝食は召し上がりますか？」

なぜ聞く。

「……いらないわ。」

「そうですか。」

ハウはテレビを消すと、二階に上がった。

「あら、起きたの。」

「お前……違和感無しに生活してんじゃねえよ……！」

「私はまだ調べ物があるのよ。」

父の書斎に入ろうとするハウを止める。

「待て、いろいろと聞きたいことがあるんだ。お前まだ怪しすぎるし。」

「何よ？」

「まず一つ。お前は何しにうちに来たんだ？」

「調べものよ。」

「誰の？」

「あなたのお父さんの。」

「わかった。じゃ次、いつ出ていくつもりだ。」

「調べ物が終わるまでかしらね。まああなたのお父さんの書齋、全部かき回すからいつになるかわからないけど。」

「……じゃ最後。」

一息置いて、一番聞きたいことを聞く。

「お前は何者なんだ？」

「それは……。」

「なんだよ？」

「教えたほうがいいのかしら……？でも一般人だし……でも子供でもあるのよね……。」

「父さんに関係あることなのか!？」

詰め寄る。

「なんで急に必死になるのよ……まあ教えてあげてもいいのだけれど……。」

昨晚、あんなにダメとか言ってたのに……

一息ついて、改まった顔で拓弥に向く。

「あなたのお父さんはどこで働いていたかしてる？」

「いや・海外で仕事をしてたつてのは知つてた。」

「何にも知らないのね・・・まあ教えてあげる。あなたのお父さんはEOSRD(European Organization for Synthetic Research and Development)・・・ヨーロッパ合成研究開発組織で働いていたのよ」

「EOSRD・・・？ヨーロッパ最大の研究機関か！？そんなすごいとこに・・・！」

「すぐなんかないわよ。今のEOSRDの状況を知らないの？」

「どづいつことだ・・・？」

確かにヨーロッパは十年前に起きたヨーロッパ大恐慌以来、国の情報を他国に知らせず、鎖国状態にあるが。

「今のヨーロッパを動かしているのはCERNなのよ。研究機関の身でありながら、政治に口出しし、実質独裁を行つてるの。」

本当かどうか信じがたい・・・  
それに。

「そんなの周りの人が反対するんじゃないか？」

「ええ、もちろん反対する人もいたわ。でもヨーロッパの人々はEOSRDに頼りすぎていたのよ。」

頼りすぎていた？

「新エネルギー、新技術、新製品・・・全部EOSRDのものだった。そしてそれをヨーロッパの人々はなくなったら困るほどに使っていた。」

「歯向かうと使えなくなるとか？」

「人質を取ったみたいなものね。でもEOSRDは別に人々に苦痛な生活を強いていたというわけではなかった。」

「ふーん・じゃあ十分、すごいじゃないか。」

「話を最後まで聞きなさい。EOSRDはその技術と権力を持って他国に喧嘩を売ろうとしていたの。」

喧嘩って・戦争か。

「はあ・・・？」

「まあもうそんな気はないだろうけど・・・私もその喧嘩を売るための一つの力として作られたのよ。」

意味が分からない。

「あなたのお父さん・雨宮教授よね。あの人は私たちを作りCERNに貢献していた。」

「ま、待て待て・俺の父さんは何をしてたんだ？」

「表向きは生物研究と称して人間に関する研究を行ったのよ。」

「あれ・・・？EOSRDって生物学研究はやってなかったんじゃない？」

一息。

「嘘よ。カモフラージュのために生物学研究はやってないって言うてるのよ。」

「じゃ、じゃあ本当に・・・？でもそれなら生物研究で何をやってたんだ？」

「さつき言ったでしょ。人間に関する研究・正確には人間の生成ね。」

「人間の・・・生成・・・？」

「人造人間ってやつよ。世界には公表せず、極秘に研究されてた。そしてその研究は成功の一步手前までたどり着いた。」

そして俺は、2年前の父の葬式で出会った父の同僚の言葉を思い出した。

「それをよく読んで君のお父さんがやろうとしていたこと・・・いや80%は成し遂げたこと・・・考えてみるといい。」

「一步手前って・・・どこまでだ?」

「内臓と皮膚、血管、そして骨などの部分はほぼ生成に成功していたわ。造れなかったのは脳。」

とハウが額に指を置く。

「やっぱり中枢のところは難しいのか・・・」

まあ、機械で作ればいいが。

「機械で作れば簡単なのにね。でもそれじゃロボットになっちゃうから・・・これはさまざまな物質を合成して作るって計画らしいわ。・たぶん私はその計画の一部で出たものよ。」

「たぶんって・・・ということはお前は・・・人間じゃないのか?」

人間じゃないなら・・・なんだ?

「自然にできた人間ではないわね、私の体は80%が合成物質だもの。生成できなかった脳は移植で手に入れたわ。」

「移植・・・というかお前の馬鹿力は?」

ずいぶん振り回したりされた。

「それは人工筋肉の影響ね。いやもしかしたらあなたが虫けらの力なのかもしれないわね。」

「うん、無いからな。」

「あら？そんな腑抜けた顔つきだからってつきりミクロン単位の蟻の力だと思ってたわ。」

「ミクロン単位の蟻って……」

そんなの存在するのか。いやするかもしれないけど。こいつ意外と毒舌だな……

「そういえば私みたいなのはほかにもいるわよ。」

「ほかにも……?」

「そう。私を知る中では自分を入れて6人。」

するとハウは父の書類を取り出した。

「ここに書いてあることでは6名の名前はそれぞれ、ウエン、ウエ  
ア、フウ、ワイ、ワット、そしてハウ。」

「最後はお前か?」

「そうね。名前の由来は5W1H……なんでこんな名前にしたのか……」

ペラペラとハウが書類をめくっていく。

「……お前、たまにどのようにしたのかが気になるって言うてるよな。」

「ええ、どのようにした、が理解できるまでは調べ続ける。」

「俺にも……教えてくれないか?」

「私の計画ではあなたは必要ないわ。」

思いつきりに何かが刺さった。  
そんな風にな言わなくても・・・

「あ、そうですか・・・じゃあがんばってくださいよ・・・」

するとハウが視線を変えて自分の後ろを見ている。

「どうした？」

「・・・後ろ。」

「え？」

拓弥が振り返ると、そこにはメイド服の家政婦が立っていた。

「げ・・・メイドさん・・・」

「拓弥様。登校のお時間ですが。」

「ええっ、もう！？まだ朝ご飯くってないんだけど！？」

「食パンがあります。」

「口に啜えて走れっていうのか！？」

「That's right .」

「その通りじゃねえよ！！」

拓弥は仕方なく食パンを家政婦から受け取り、制服にさっさと着替えて、家を出た。

残された2人の金髪少女とメイドはなぜか睨み合っている。

「あなた・・・もしかして・・・」

「では私は洗濯をしなければなりませんのでこれで。」

メイドがきつちりとした步調で、階段を下りていく。曲がり角を曲がる直前に何かを呟いた。

「<sup>メイド</sup>いつ追いついたらいいでしょうか・・・」

その呟きはすでに部屋に戻ったハウには聞こえなかった。すぐにメイドの姿は消え、数分後には洗濯機が動く音が聞こえ始める。

放課後。

「第二実験室って・・・ここだよな？」

俺は今日の2時限目の理科で特別講師に呼び出された。外国人でなんかやたらとカタコトな日本語で聞き取りにくかったが、第二実験室で待っているとは聞いた。

「それにしてもなんでここなんだ・・・？」

長い廊下の一番端で日が入らず、生徒も気味悪がって入らない場所だ。

別に職員室とかでいいと思うんだけど・・・  
やっぱりあれか。

あの特別教師がどこから来たか思い出す。

「ヨーロッパ合成研究開発組織から来たハデス先生です。」

E O S R Dのこと・・・ね。

やっぱり無視して家に帰るべきだったかもしれないと後悔していた。しかし、その考えはE O S R Dという巨大な組織に歯向かうことと同じかもしれないと思ってしまい、できずにいる。

本日何度目かわからない溜息をついて部屋に入った。

第二実験室は2度ほどしか入ったことがない。

なぜなら実験のほとんどは第一実験室で済むからだ。

そんなに広くはなかった。並の教室程度。

実験用の4人机が6つ。

端には掃除用ロッカーが二つほど。

外からの光はカーテンによって遮られ、隅から光が少し漏れ出していた。

その光を眺めながら、立つ見た目30代ほどの特別講師が立っている。

「あ・・・」

「確保。」

瞬時。

ロッカー、机の下、隣の準備室、カーテンから物々しいものをいくつも体に付けた者たちが飛び出し、床にねじ伏せられた。

「ぐっ・・・!？」

「確保完了しました、アウディ部長。」

「アウ・・・ディ・・・？」

「ご苦労さん、はぁー、疲れた疲れた。」

アウディと呼ばれたハズだった講師は顔を手でぐしゃっと握ると、皮をはぐようにマスクを外す。

現れたのは都会にいるようなチャラチャラしたような不良のような顔。

「まったく、なんでこんなガキ一人に俺がおっさんみてーな真似しなきゃいけないんだよ・・・」

さっきのカタコト外人とは全く別の日本語が耳に届く。手首と足首にガシヤツという音がして何かがはめられた。

頭を押さえつけられているため見えないが、おそらく手錠と足枷だろう。

アウデイが近づいてくる。

そして腹に強烈な蹴りが入った。

「ぐふっ!?!」

「さーて、お前にはちょっと聞いてえことがあるんだよな、拓弥君?」

「な、なん・・・?」

「てめえのの親父がてめえに吹き込んだことだよ。あと物もな。」

アウデイが腰のポケットをまさぐる。

そして俺の額に拳銃が突きつけられた。

「全部話てくんねえかな?俺もこんなクソ仕事早く終わらせてえんだよ。」

それは俺の死で終わるのか。それともヒーローみたいなのが助けにくるのか。

しかし、答えは後者だった。

「・・・敵だ!ぐふっ・・・!」

警備していた兵士の一人がうめき声をあげて倒れる。  
横にいた兵士が倒れ、そのまた横も。

「ああ？ちっっ。第一級危険物体かよっ！」

アウデイが突きつけていた拳銃を離れた。  
その隙を見計らってか、俺を押さえつけていた兵士がうぐっという  
声を上げて倒れた。

「いまだっ！うっ！？」

束縛から解放され、逃げ出そうとしたら目の前に兵士が倒れこんで  
きた。

腹に拳くらいの穴が開いている。

「伏せてなさい、この雑魚！」

「その言い方はひどいと思うぞっ……」

とは言いつつも助けに来てくれたハウの意見に従い伏せる。  
その上を白くて小さい平行四辺形のパネルのような物が飛んで行っ  
た。

それが別の兵士の胸を貫通する。

「そっといえばアウデイはっ！？」

見ると机の影に隠れていた。

口の周りを舐めながら拳銃を構えている。

やばい……

そう感じた。

「ハウ！早く逃げ・・・！」

「早く逃げるわよ！！！」

こっちが言う前にすでに行動していた。

手を握られ、部屋を飛び出す。

出た瞬間に扉の窓ガラスが銃声とともに割れた。

「本物かよ！？ここ日本だぞ！？」

「奴等はEOSRDから来てるのよ！！」

「でも検閲とかあるだろ！？」

「隠しルートがあるのよ。奴等だけのね。」

「隠しルート・・・？」

隠しルートってことは輸入とかの船に紛れるとか？

「詳しいことはあとで話すわ！今は逃げるのよ！」

後ろを見るとさっきの連中が追いかけてきていた。

「どんだけいるのよ・・・あの教室でいるので6人は殺ったはずなんだけど・・・」

「殺った！？殺したのか！？」

「当たり前じゃない。そうしないとこっちが殺されるもの。」

ベテランの兵士みたいなことを16歳が普通に言っている。

「とにかくあなたの家に戻るわよ。」

「あ、ああ・・・」

まだ頭がこんがらがっている。  
走ってるうちに校庭にでた。  
部活中の生徒が興味津々に見ている。  
どちらかというとうとハウを特に。  
まあ学校に来たことなんてないし・・  
とみるとハウの格好が変わっていた。  
黒いマントで身を包んでいたが、だいぶ変わってショートパンツに  
ブラウス。  
できるだけ肌を見せているような格好だった。

「なんでそんな格好してるんだ・・？」

するとハウがちよつと力を入れたらしい。

次の瞬間、ハウの肌が露出している部分からありとあらゆる刃が飛び出した。

「うおっ！？」

「これが私が戦争のために体に埋め込まれた機能・・『デーゲン・ヘルシャー剣の支配者』」

「ドイツ語？」

「なんでドイツ語なのかは知らないわ。」

それを名づけたのが父さんだったら、その理由はただ一つ。かつこ  
いいからの一点張りだろう。

「来たわね。」

「え？」

後ろを見ると5人くらい追いかけてきていた。その一番後ろにアウ  
デイがいる。

「さつさと捕まえる！男のほうは殺すな！女のほうは撃ったっていい！どうせ死なないからな！」

死なない？何言ってるんだあいつ・・・？

「こつち！」

ハウに誘導され、校門を出て左に曲がる。

「おい、こつち帰りの道じゃないぞ!？」

「じゃあ右を見て見なさいよ。」

言われた通りを見ると追手が来ていた。

「もともと帰り道に配備されてたみたいね。迂回していくわよ!」

「え!?!じゃあ家に戻らないほうが・・・!」

「書類が置いてあるのよ!!」

ハウが後ろを振り向く。

するとさつきからハウの周りをくるくると公転していた6つくらい連なった平行四辺形のパネルが追手に向かって飛ぶ。

そして先ほどのように穴をあけ、血を垂らしながら戻ってくる。

「な・・・なあ、なんだその武器・・・」

走りながら聞く。

「私の武器の一つ、ホーネットよ。雀蜂無線誘導兵器と言ってもいいかもしれないわね。自律させることもできる。『デーゲン・ヘルシャー剣の支配者』で唯一

の遠距離武器。」

公転するホーネットがまた一つ飛ぶ。

「ただ操作性に難があるのが問題だけど・・・！」

でも結構うまく使ってるけどな。

「撃て！！！」

追手が構わず、持っていたマシンガンを乱射し始めた。

「ここ住宅街だぞ・・・！？」

すぐ横を銃弾がかすめた。

「どこかに隠れないと・・・うあっ！？」

「ハウ！？」

横で走っていたハウが前につんのめった。背中から血が出ている。撃たれたらしかった。

咄嗟にゴミ置き場の影に隠れる。

「お、おい！！大丈夫か！！！」

「だ、大丈夫・・・よ・・・あなたに心配されるほどでは・・・ないわ・・・ごほっ、けほっ・・・！！」

明らかに大丈夫じゃない。

「き、救急車を・・・！！」

「呼べるわけ・・・ないでしょう・・・うつ・・・」  
「ハウ!?」

一瞬、死んだかと思った。

しかし、おかしいことに気づいた。

血が、

止まっている。

いやそれどころか銃弾が当たった傷跡さえも消え失せ始めている。  
呼吸を安定させたハウが言い出した。

「ホント・・・嫌なものよね・・・合成物質でできた体のせいでこれ  
くらいの傷じゃ死なないなんて・・・」

そうだ。

ハウは人間ではなかった。いや人間になり損ねた。

合成物質と機械と別の人間の体でできた人間とは呼べるかどうかわ  
からないものなのだ。

でもそんなのは今どうでもいい。

「・・・逃げるぞ!」

「あなたに・・・言われるまでもないわ!!」

完全に調子を取り戻したハウが近づく敵にもう一度ホーネットを飛  
ばす。

また走り出す。銃弾が後ろから飛んでくる。

「クソ・・・本当になんなんだよ・・・!!」

こんな、一晩でこんな状況に陥るなんて。

夢だったらしいかと、そんな叶うわけもないことを考えていた。

「はあ、はあ・・・大丈夫か？」

「あなたこそ・・・大丈夫なの？」

公園の公衆トイレに逃げ込んで5分。

自律機能を発動させたホーネットを囿にしたおかげでなんとか撒くことができた。

「な、なあ・・・一つ・・・聞いてもいいか？」

「何？」

やっとここで閉まっていた疑問を投げる。

「なんで・・・助けにきてくれたんだ？俺はいらないんじゃないか？  
なかったのか？」

「状況が変わったのよ・・・あの書類を読んでね。」

あの書類に？

「何が書いてあった？」

「まあ書類によるとあとは5W1Hからの武装供給ができる・・・かしらね。ずいぶんとずるい能力ね・・・」

「どづいつことだ？」

「実際にやってみたほうが早いわ。」

するとハウが詰め寄ってきた。

「な、なんだよ・・・」

暗くて狭い、公衆トイレの中で二人きり。

獣の歩き方みたいな感じで詰め寄ってくるハウ。

そしてなんか妙な感じがしてずりずりと後ろに下がる俺。

ついに壁に当たってしまった。もう後ろに引き下がれない。それでもまだ寄ってくる。

「お、おーい・・・ハウさん？」

「じつとしてて。」

耳元でささやく。

「やさしくしてあげるから・・・」

え？何をですか？

「ふっ！」

「ぐおっ!?!?」

胸筋にやさしいのかけらもない肘鉄が送り込まれた。

「ぐえっ!ごぶえっ・・・!!何すんだよ!!!」

「あなたが持つっている性的興奮を向上させたのよ。」

「見事に落ちてるぞ畜生!」

いやいやいや。畜生ってなんだよ俺。

「冗談よ。今私の能力の半分を転移したのよ。」

「半分・・・転移?」

「周りを見て見なさい。」

「ん・・・うおっ!?!?」

見ると6つで連なったホーネットが自分の周りを公転している。

「まあ制限時間があるらしいけど。」

「制限時間？」

「転移した武装を使い続けることができる限界時間は5分。武装をいくつか一緒に使うことができる時間は3分。」

「以外と短いな・・・」

「それほどずるい性能ってことね。あと身体能力も少なからず上がってるはずだわ。」

ピョンピョンとジャンプしてみる。

「ホントだ・・・身が軽い！」

「嘘よ。」

「嘘かよ！」

「嘘なのに身が軽いつて・・・ブラシーボ効果かしらね？」

「黙れこの野郎！」

クスクスと笑っている。

本当になんなんだこいつは・・・でも笑った顔は結構かわいかった。

本当に、人間のように。

でも人間じゃない。

「なあ、ハウ。お前は・・・」

人間になりたいのか？

でも、

でもその疑問は銃声によって妨げられる。

「見つかった!？」

また逃走劇が始まる。

## 第サン話 時ノ家政婦（前書き）

この物語はフィクションです。

この物語の舞台は現実世界とは似て非なるものです。

実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものは、名称が同一であつても何の関係もありません。

## 第サン話 時ノ家政婦

「あゝ・・・親父？」

アウディはうんざりした表情で、粹なしディスプレイの奥で険しい顔をする黒人に報告する。

「今は逃走中だよ。家に戻る気らしいぜ・・・ま、すでに手下は送り込んであるけどよ。」

ずっと黙っていた黒人が口を開いた。

「お前は手を出すな。」

「あ？」

「あそこにはすでに有能な我が配下のものがある。お前の下品な手下には任せられん。」

アウディは頭に血が上り始めているのを感じた。

「なんでだよ？親父だって俺の戦歴知ってんだろ？だったら任してくれよ！」

「お前の戦績は全部ボロボロにしたテロリストの殲滅作戦だったからな。スコアが高いのは当たり前だ。」

「ナメてんのか、親父？」

画面越しの親父と呼ばれている黒人に鋭い、そして悪質な目つきで睨む。

「ナメてはいないさ。だがお前はまだ若い。私の配下の働きを見て学ぶことだ。」

そこで通信は一方的に切られた。

アウデイは怒りをこらえきれず、近くの椅子を蹴り飛ばす。

「ふざけんな！クソ親父が・・・！！」

アウデイは怒りをためたまま、車から外に出る。

そこはさつき、逃亡者の二人組が立てこもっていた公衆トイレがある公園だった。

アウデイに一人の兵士が近づく。

「なんだ？」

「目標が家まで到着してしまったようです・・・」

「見張つとけ。」

「し、しかし・・・あれは我々の獲物では・・・」

「あのクソ親父の部下がこれからやるらしいぞ。勉強のためにみておけだよ。」

「は、はあ・・・」

アウデイは通信車に戻って、雨宮家の前に取り付けた監視カメラの映像を見る。

『やっと戻れた・・・！』

『とにかく中に戻るわよ。』

『おかえりなさいませ、拓弥様。』

「ふん、見せてもらっぜ・・・」

その地域にはポツポツと雨が降り始めていた。

「やっと戻れた・・・！」

歩き続けて、敵を倒して、迂回して20分。

やっと我が家に戻ってこれた。

俺は結局ホーネットは使わなかったが。人殺しなんかできない。

「とにかく中に戻るわよ。」

ハウは早く書類を確保したいようで、扉に手をかけていた。だったら肌身離さず持っていればいいのに。

「おかえりなさいませ、拓弥様。」

扉を開けたらメイドが直立していた。

「あ、あー・・・メイドさん・・・今ちょっといろいろ忙しいから家事頼みます・・・」

どうやらこれから忙しくなりそうだから頼むことにした。いつもは普通に「わかりました。」と帰ってくる。だけど今日は違った。

「なぜですか？」

「え？なぜって・・・そりゃメイドだし・・・」

なぜと言われたらそう答えるしかない。

「すみませんが、拓弥様。私、これから仕事があります。」

「仕事？仕事なんてやってたっけ・・・？」

ていつかいつも家にいた気がする。

「はい。では始めさせていただきます。」

「え？ここで？」

なんで？と思つた時、ハウが動いていた。

「させない！！」

腕から伸ばした長く、細い剣ををメイドに向かって突き出す。

「おい・何を・・・っ!？」

ハウの剣はメイドのその手をとらえていた。

剣が刺さった手からは血が流れている。

そしてメイドの手から拳銃が落ちた。

「え・・・？」

メイドが後ろに大きく跳躍。

家の廊下の端まで下がった。

そして話し出す。

「さすがに不意打ちは無理でしたか。」

「あなた・・・EOSRDね？」

「はあ・・・？おいハウ、何言ってる・・・？」

そんなことあるわけないだろ・・・

「ええ、その通りです。」

「っ・・・！？」

メイドさんが・・・EOSRD？

馬鹿な・・・

でもよく考えてみればこのメイドは父さんの専属メイドだったと聞く。

「なんで・・・俺を・・・？」

「EOSRDからの命令ですので。」

ハウが話に割り込む。

「よっぽどEOSRDに忠実なのね。あと、もう一つ。」

「なんでしようか？」

「あなた・・・人間じゃないわね？」

「は・・・？」

待った。そんなことあるわけ・・・

「はい。」

あっちゃった……。

「私の名はウエン<sup>Wheen</sup>。5W1Hの一人です。」

……5W1H。

「やっぱりね……見るからに怪しいから。」

「怪しいのか……？」

「そういうあなたはハウ、5W1Hの異質な存在ですか。」

「異質って何よ。別に周りの5人とは変わらないわよ。」

そうなのか。

「私はあなたの処分の命令も受けております。」

「そう。」

今こういう風に普通に話しているが、メイド・ウエンが口を開いた時にはすでにリビングで闘いが始まっていた。  
俺は巻き込まれないように廊下側に撤退。

「第二腕……69式機関銃！」

ウエンがそう叫ぶと腕が変形し、機関銃の形を形成していく。  
そしてすぐに発砲。

「っ……！ 欄花<sup>らんか</sup>！」

ハウの手首から日本刀の刀身のみが伸びる。  
そして向かってくる銃弾をはじき落とした。

「あいつ……化物かよ……！」

まあ再生したりと人間ではないけど。

「話してる暇があるなら上に行つて書類を確保しなさいよ!」

「え?あ、ああ!わかつた!」

階段を駆け上がり二階へ。

下では銃声と鉄が鉄をはじく音が聞こえる。

扉を開けて父の書斎へ。

書類は机の上にあつた。

「これだな・・・あ、あともう一つ・・・」

思い出して棚をあさりはじめた。

「ぐっ・・・!」

「第一腕・・・村田式散弾銃!」

相手の腕から散弾が飛んできている。

「車輪刀!」

腰につけていた大きな手裏剣に見えるものを取り出し、腕に真ん中の輪をかけてくるくと回す。

回転はすぐにヘリのプロペラ並の回転力に。

周りの皿や、物が吹き飛んでいくが関係なかった。

飛来した散弾が刀身に当たり、はじけて吹っ飛んでいく。

「はあっ！」

そのまま回転力を使って車輪刀をウエンに向かって手裏剣を投げるように飛ばす。

ウエンは腕の機構を変形させているが間に合わない。

勝った……！

「第一、第二、特殊機構発動！」

ウエンが両手を突き出した。

すると、

車輪刀がそこだけ時間の進みが遅くなったかのように、スピードと回転を急激に落とした。

「くっ……特殊機構……！」

特殊機構。

書類で読んだ話なのだけど、5 W 1 Hにはそれぞれその名前にちなんだ特殊な能力が用意されているらしい。もちろん戦争用で。

ウエンはいつ<sup>When</sup>。つまり、時を操る能力を持つ。どういう原理かは知らない。それと私はどの<sup>How</sup>ようにだけど……発動したことはない。

「攻略が難しい機能ね……それでもっ……！」

床を蹴り、体を低くしながら相手の懐へ。

すぐにこちらへ銃を構え直してくる。

このままだと突貫する形で、蜂の巣にされる。

なので横に飛ぶ。

でもほんの数センチだけ。  
今ウエンが出してきた銃は見た感じ狙撃銃のようだから、数センチの狂いでも外れる。

「もらったわ！」

「ガンズボックス、起動！」

するとすぐ横に落ちていた真つ黒な箱が動き出した。

しまった・・・ホーネットと同じで分離武装か！

でもすでに相手に向かって走り出している。

大丈夫・・・！撃たれても私には人間には程遠い、あの能力がある。こいつはEOSRDの改造で全身機械になっているから不死身ではない・・・！

「やああっ！！！」

「っ！？」

刀を思いつきりメイドの胸に突き刺した。

直後、横から衝撃がくる。

「あぐっ・・・！」

吹っ飛ばされて壁に叩きつけられた。全身に小さい弾が食い込み、引き裂いていく感覚がする。

「でも・・・これで・・・」

「終わってませんよ。」

「っ！？」

まだ生きている！？

「まあ、頭の予備動力で動いているだけですが・・・あなたは合成物質のおかげでほぼ不死身なんですね。でもそれでも再生できないところがあるでしょう?」  
頭に拳銃が突きつけられた。

「あなたの脳は移植で手に入れたもの。合成物質ではありません。」  
「・・・。」

雨宮の父が作れなかった部分。  
右腕は再生が終わってもう動く。

「・・・!」

右手首から伸びる刀はウエンの脳天を狙った。  
しかし、動かない。  
いや動いていた。とてもゆっくりと。

「私に特殊機構をかけたのね・・・」  
「はい。ではもういいでしょうか。殺しても。」

自然にウエンの銃を握る手に力が入る。

「くっ・・・」

せめて私がどうやって生まれたかどうかくらい知りたかったけどね・・・

「では6番目のハウ<sup>WORLD</sup>・・・さようなら。」

そして引き金を引いた。

引いたのは。  
俺だった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

引いた。引いてしまった。

「雨宮？」

「は、離れるっ！ハウから離れるっ！」

「もう死んでるわよ。」

「え？」

ウエンは頭を後ろから撃たれて死後硬直のように固まっている。

「死んでるといふよりかは壊れた、ね。この人・・・もともとは私のような合成物質だったんだけど。EOSRDに改造されてロボットになったらしいわ。」

「あ、ああ・・・そう。」

「それよりそれ。どこで見つけたのよ？」

ハウが少し足を引きずりながら寄ってきて、持っている拳銃を指差した。

俺の手はまだ震えていた。

「あ、ああ・・・これか・・・これな・・・えーっと・・・父さんの書齋で見つけたんだ。」

「書齋に？」

「一度、父さんがまだいたとき見せてもらったことがあるんだ。犯罪だけだな・・・」

「CERNの科学者なんだから持っけてもおかしくはないけどね。それより・・・手ひどくやられたわ。」

「そうだな・・・俺んちのリビングが・・・」

「違うわよ。私のことよ。」

「別にお前は再生するからいいだろ・・・俺のリビングは再生なんかしない・・・」

修理代とかあとで請求しようかな。

そんなことを思っていたら、ハウがつつむいていた。

「私だってこんな能力なんていらなのよ・・・」

「え・・・？っておい！どこ行くんだよ！？」

出て行ってしまった。

「・・・泣いてたな。」

謝っておくべきだろうか。いや悩む必要もない。俺が言ったんだから。

荒れ放題に壁やテーブルが破壊されたリビングをせめて片づけるくらいはしたいが・・・

泣かせたままほっておくのも悪い。

「で、親父。有能な部下とやらは頭を吹っ飛ばして死んじまったぜ？」

「……黙れ。」

「やっぱり親の言うことなんか聞かずに突貫してればよかつたかもなあ……そうすればせめてあのガキぐらいは捕まえられたかもしれないのによ。」

「黙れ。撤退しろ。」

「へいへい。わかりやしたよ。無能なクソ親父。」

「!!!」

最後は通信終了のボタンを殴っていた。

「ふざけるな!!なぜ我々EOSRDの結晶が、あの……あの馬鹿どもたちにやられるのだ!!!」

戦闘能力は5W1Hの中でも上だぞ!?やはり、オリジナルではないからか……?

「た、隊長……落ち着いてください……!」

「落ち着いている……!……仕方ないが我々も撤収する。」

「は、はい……」

冷静になり、先ほどの戦闘資料を見る。

今回はクローン体だったからな……次はオリジナルを出してやる……!

そう。

ウエン<sup>When</sup>は1体ではなかった。

「……。」

もう夕刻の日暮れ時。

拓弥の家から少し離れた公園のブランコにハウはいた。公園の広場のほうにはさっきまで車が置いてあったかのような跡がある。

EOSRDが撤退した後かもしれない。

「……。」

キィキィとブランコがきしむ音だけが公園に鳴り響く。手を見た。

さっきの戦闘で吹っ飛んだ指がもう爪まで再生している。

剥がれた皮さえも、じゅくじゅくと音をたてて再生していく。

「くっ……!」

その手を握りしめた。

こんな些細なことで怒りを覚えるなんて私らしくない。

でも……私らしいって何？

EOSRDの研究所では話し相手は雨宮教授だった。

でも日常会話などではない。「体の調子はどうだ？」とか、「新しく投与した薬剤はどうだ？」とか。

疑問形ばかり投げられ、それに頷くだけだった。

はつきり言って感情が芽生えだしたのは、あの反乱の時。

私たちを戦争の道具にしようとしたCERNから逃げるために起こ

したあの反乱。

それ以降はここに来るまで人と話していなかった。当然、私らしいとかなんてわからない。

いや、まず自分自身のこともよく知らない。

だから知りたい。どうやって生まれたか。どうやって私を作ったか。そしてどのように生活していたのか。

そう。

私は記憶がとても曖昧。

思い出せるのはさっきの日常会話とは程遠い会話ぐらい。

だから、知りたい。

そして知ったら今度はこの嫌な機能を消して、限りなく人間に近づきたい。いやなりたい。

そして、普通の生活がしたい。

実験の材料にもされ、戦争の道具にもされ、一生白い壁の部屋の中で生き続けるような地獄の生活とは違い。

途中で見た、普通の人間の生活が、したい。

雨宮のような生活がしたい。

「ってなんでここであの雑魚がでてくるのかしら・・・」

確かにさっきは助けられたけど。

でも普通の人間になるのはE O S R Dという大きな壁を乗り越えなければならぬ。

そしてこの書類のとおり、雨宮もそれに巻き込ませなければならぬ。

「・・・なんで私は。」

5 W 1 H なんか生まれただろう。

こんな体にならなければ普通に人間として暮らせたかもしれないの

に。

雨宮を巻き込むことになんかならないのに。

「お、いたいた。おい！」

「……。」

なんで見つかったのかしら。

「こんなとこにいたのかよ……」

「……何しに来たのよ。」

「いや……泣いてたのかと思ってさ……」

「泣いてないわ。私が泣くのはこの世の終わりよ。」

「お前はこの世の終わりまで生き続ける自信があるのか……？」

「ま、まあ悪かったな。お前のこと考えずにいろいろ言っちゃって

さ……」

その時、

私の口からクスクスと笑い声が出ていた。

「おい、何笑ってんだよ。気持ち悪いだろ。」

「謝れるとは思ってなかっただけのことよ。」

「じゃ、帰ろう。お前に手伝ってもらわなきゃならないことがある。」

「

何よ。」

「リビングの片づけ。」

「女に力仕事をさせる気？」

「めっちゃくちゃにしたのおまえだろ！」

「あら、そうだったかしら？まあ知らないわ。」

「あれ……？お前いつもの毒舌はどうした？」

「

夕日を背に雨宮に振り向く。  
長い金髪がなびく。

「毒舌？何それ？食べられるの？」

雨宮の顔が少し赤らんでいた。私に惚れたのかしら？  
私だって少しは雨宮に対しての見解は変わったのよ。

余談。

あの後俺たちは、部屋の片づけをした。一番つらかったのはメイドの残骸を不燃なのか可燃なのかということだった。  
結局粗大ごみに出したけど。  
そのメイドの片づけをしていた時。

「やつぱり、1年間とはいえ一緒に生活してたからなあ・・・捨てるのは悲しいな・・・」  
「でもあなたのことを誘拐して私を殺そうとしたのよ？いいざまじやない。」

「うーん・・・お前は一緒に生活してないからわかんないだけで・・・  
ってあれ？」

「どうしたの？」

「なんか・・・光ってる。」

見るとメイドの残骸・・胸部の部分だと思っが、そこが青白く光っている。

そしてその光は宙に浮かび、俺の胸へと吸い込まれていった。

「な、なんだよ・・？」

「ふーん・・たぶん今の、メイドの力を吸収したのね。」

「吸収・・あ、そういえばお前そんなこと言ってたな。」

「ウエンだから・・時の力が使えるんじゃない？まあ今使ったら殴るけど。」

「なんで？」

「あなた、絶対私に向けて使っつもりでしょう。そして動きが鈍いのをいいことにあんなことやこんなことを・・やらしい。」

「お前にためしに使っってみようとは思っただけど、お前が極度な変態だからやめておくよ。」

「なんで私に変態なのよ。」

「お前の考えることがいまままで全部変態だったからだよ！！」

「そんなことは考えてないわよ。あなたのことは多少信じ始めてるんだから妙なこと言って私のあなたへの好感度を下げないでくれる？」

「お前が言い出したことだと思っただけど・・まあ多少でも信用されるのは悪い気はしないね。」

「多少と言っても私の多少は0.8パーセントよ。」

「お前、多少の意味知ってる・・？」

そんなことがあった。

で、ハウは正式にうちに居候することになったわけ。

そのあと、服を調達するとか学校に入るとかなんとかあった。

まあこれが物語の始まりだとは・・・な。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6502y/>

---

オレたちノ戦争ビヨリ

2011年11月19日13時59分発行